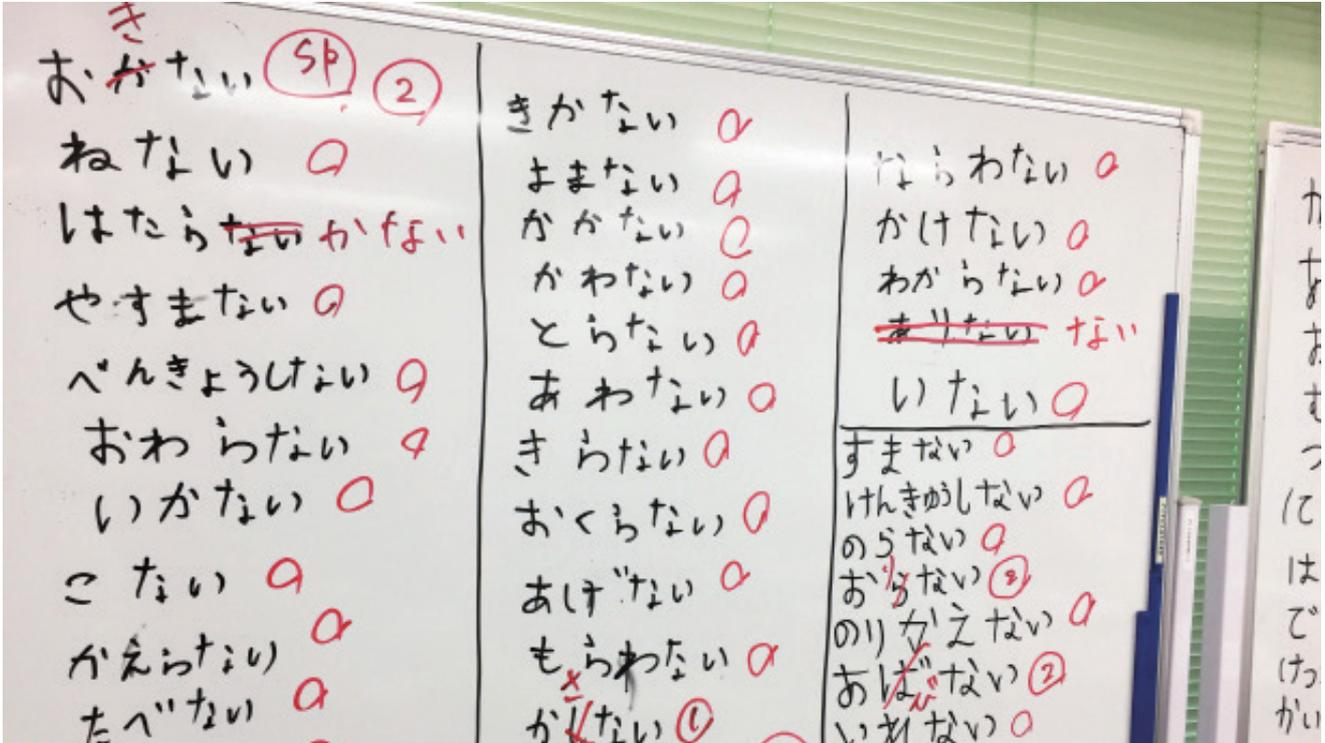




Contents

- 働くことは、生きることーシャバニさんの話
- JAR の就労支援～ノーニホンゴ・ノーライフ～
- 難民が安心できる空間づくり～進捗報告～
- 最近の事業進捗



COVER STORY

働くことは生きることーシャバニさんの話

中部アフリカに位置するコンゴ民主共和国出身のシャバニさん(30代)は、妻と子どもを残し、単身で日本に逃れてきた。コンゴの公用語はフランス語だが、彼は英語、リンガラ語を含め5つ以上の言葉を話す。日本に来てから学んだ日本語の上達も目覚ましい。来日直後はホームレス状態になるほど困窮し、苦しい生活を余儀なくされた。今は仕事が決まり、生活は落ち着いている。来日して2年が経つが、難民申請の結果はまだ出ていない。将来の展望は見えない。会えない娘のことを考えると胸が苦しくなるという。

コンゴでは、自身で会社を立ち上げ、貿易の仕事をしていた。商売をして自分の力で稼ぐことを教えてくれたのは、母親だ。小さい頃から、何もせずに母親からお小遣いをもらうことはなかった。自分で体を動かしたり、母親を手伝ったりした対価としてもらうというのが彼にとってのお金だった。そんな母親からの教育を受けてか、貿易の仕事は順調だった。

しかし、ある日を境にそんな平穏な日常が急変した。政情不安が続く母国で、身に覚えのないことに突然巻き込まれ、警察に逮捕された。数週間に渡り、激しい拷問も受けた。今も体に残るその時の傷跡が何よりの証拠だ。同じく監禁され、拷問を受けた人が、独房に戻ってこなくなったのを

見て、自身の死も覚悟したという。シャバニさんにとって、思い出すことすら辛い過去だが、時折言葉に詰まりながらも話してくれた。



体に残る傷跡 (イメージです)



スタッフに近況を話すシャバニさん

その後、知り合いのついでで、何とか独房を抜け出すことができた。だが、外に出ても命を狙われる状況は変わらず、町を転々とした後、国外に逃れることを決意する。日本に来たのは偶然ビザが取れたからだ。貿易を通じて、アジアには馴染みがあったが、日本には縁もゆかりもなかった。しかし、他に選択肢はなく、妻と幼い娘を残し、とにかく身の安全を確保するために母国を後にした。

住所を頼りに JAR へ

来日を手引きしたブローカーに難民支援協会 (JAR) のことを聞き、ネットで住所を調べ、四ツ谷駅に降り立った。秋が終わり、冬の寒さを感じる頃だった。すぐに事務所が見つけれず、困り果てて道行く男性に英語で声をかけたところ、その人がスマホで地図を見ながら、事務所まで連れ送ってくれた。日本に来てからの宿泊や交通費、ブローカーへの支払いで持ち金は 3,000 円ほどだった。

JAR にたどり着いたものの、「今夜寝る場所が必要」という彼に提供できるシェルターはなかった。すぐに外務省保護費の申請を出した。受給できるまでの数ヶ月は、JAR からの支援でしのいだ。シェルターが空くまでの 3 週間は、ネットカフェや 24 時間営業のファストフードなどを転々とした。「あんな生活はしたことがなかった。体もきつかったが、気持ちの方がもつきつかった」と当時を振り返る。その後、JAR のシェルターへ入居し、就労が許可されるまでの半年間を、外務省保護費でなんとか食いつないだ。

仕事があることはとても重要

「働くことが好き。仕事が大変か楽かは関係ない」と笑顔で語るシャバニさん。JAR の支援を受け、現在は、都内から 1 時間半ほどの関東近郊で働いている。「日本に来たばかりで働けなかった時は苦しかった。ただ寝て、起きる。その繰り返し。余計なことをばかり考えてしまう。仕事がある今は、朝起きて、仕事行って、スーパーに買い出しに行って、料理して、週末は掃除して……。生きるために、自分自身を使うことができる。だから仕事があることはとても重要」。いわゆる田舎暮らしにもすっかり慣れたようだ。「今暮らしているところはすごく田舎。黒人を見たことない人ばかり」という。もちろんコンゴ出身者もいない。「はじめはあまり話さない人ばかりで、オープンマインドな人が少ないと思ったけど、今では、みんな、自分のことを知っている。スーパー

の人も、警察の人も、みんな」。

ビジネスでさまざまな国の人とやり取りをしてきた彼は、日本の状況をこう分析する。「日本の人は、日本語ができると分かると急に親切になる。本当は話したいけど、日本語で通じないから怖いんだと思う」。

職場で一番の仲良しは加藤さんだが、出会った当初は、全然話してくれなかったそうだ。シャバニさんから積極的に「おはよう。元気？ ご飯食べよう」と話しかけ、距離を縮めた。「日本語はキー。話して、笑って、ジョーク言って。上手いか下手かは関係ない。とにかく話かけることが大事」。シャバニさんは職場のムードメーカーだ。彼を通じて「難民」のこと知った同僚たちは、今ではコンゴのニュースをネットで調べて「こんな事件があったね。これは大変な状況だから母国には帰っちゃいけないよ」と声をかけてくれる。

支援がほしいわけじゃない

親しくなった人もいるが、「難民」と知って、離れていった人もいる。「難民=物乞いのイメージを持っている人もいると感じる。難民自身が問題じゃないのに誤解されていると思う。みんなが難民を歓迎したいわけじゃないことも分かる」。支援を受け、自立につながった彼だが、「本当は支援を受けなかったわけじゃない。自分はこれまで自分の力で働いて稼いできた。だれかにお金をもらおう、面倒をみてもらうことは望んでいない」と語気を強める。

同時に、支援への感謝も口にする。「JAR が僕の生きる道を示してくれた。今生きているのは JAR のお陰。特に就労準備



日本語プログラムの提供や、通うための交通費をサポートしてくれたのは本当にありがたかった」。

生活はだいぶ落ち着いたが、難民申請が遅々として進まないことに苛立ちを隠せない。申請してからもうすぐ 2 年。入国管理局からは全く連絡がなく、自分が提出した書類が審査されているのかも分からず不安になる。「助けを求めて逃れてきた人にドアを開けるということは、命を助けること。日本にはもっと難民をウェルカムしてほしい」と願う。厳しい状況だが彼は、希望を見失わない。「遠くに飛ぶ時は数歩下がって助走が必要。今の僕は前に進んでないかもしれないけど、きっと将来のために必要なんだと思う」と自身を鼓舞する。

*本記事では個人が特定されないよう記載に配慮しています。

JAR の就労支援～ノーニホンゴ・ノーライフ～



就労準備日本語プログラムの修了式

難民申請中の公的支援が十分でない中で、難民は来日間もない時期から、生きるために働く必要に迫られる。同時に、多くの人は、支援に頼ることなく一日も早い自立を望んでいる。JARは、就労資格のある難民と企業をつなぎ、難民が安心・安全に働き続けられるよう支援している。試行錯誤して作りあげてきた体制が軌道に乗り、2016年度は、20社41人の就職につながった。工場、清掃サービス業の他に、最近では、医療・介護などの新しい業種にも広がっている。JARの就労支援では、面談を通じて母国での職歴や希望などを確認し、日本語習得を含む3ヶ月間の就労準備日本語プログラム、難民向けに企業がブースを出す「ジョブフェア」、そこで双方の関心があれば、会社見学・OJT（実地研修）に進み、企業と難民双方が納得した上でマッチングし、就職後はフォローアップを行う。就職にあたって、日本語力

は重視されるが、難民申請者の多くは日本語を全く勉強したことがなく、日々生きていくことに手一杯で、じっくり日本語を学ぶ余裕はない。就労準備日本語プログラムではダイキ日本語学院東京と提携し、3ヶ月間で平仮名・片仮名、文法、会話に加えて、日本の職場で期待されるマナーやフレーズなどを集中的に学習。日本語ゼロからスタートした生徒も、修了式では日本語で答辞をこなすまでに上達する。お互いに知らない人同士だったクラスメイトたちは、毎日（平日）3時間、ともに頑張ることで仲間意識が生まれ、全員が涙する修了式もあるほどだ。約10人の少人数で、1ヶ月半ごとに新しいクラスを始め、現在12期生が学習に励んでいる。「ノーニホンゴ、ノーライフ。もっと日本社会に溶け込みたい」。そんな難民の声に応えて、これからも日本の職場に一步を踏み出すための後押しとなるプログラムを提供していく。



ジョブフェアでの面接

難民が安心できる空間づくり～進捗報告～

JARを訪れる人は毎年増えている。昨年度の相談件数（事務所内）は、2013年の1.5倍にあたる3,142件にのぼった。待合スペースに人が入りきらなかったり、相談室の声が聞こえてしまったりと、8年前から利用している現事務所の限界を感じることも多くなった。そこで、難民の方々が安心して過ごせる事務所をつくるべく、移転実現のための資金を募るキャンペーンを実施。7週間で800万円という高い目標にも関わらず、想像をはるかに超える多くの方から賛同いただき、わずか1週間で目標金額が集まった。達成後も、現事務所の退去にあたって必要になる、原状復帰のための工事費を引き続き募り、最終的に387人から1,303万円をいただいた。資金のみならず、設計事務所の方などから協力のお申し出もあり、プロの手も借りて、新しい事務所をデザインしていきたい。反響の大きさにはスタッフ一同、驚きつつ、難民のための空間づくりを応援したい人がこれだけいることに大いに励まされた。

現在は、新事務所で実現したい要件の優先順位を議論しながら、神田近辺を中心に物件探しを続けている。探し始めてみると、難民支援の観点から配慮すべき点があった以上

に多く、70件以上の提案を受け、10件を内見。最終決定に向けて議論を重ねている。年内には物件を確定、春の移転を目指す。最近ではさらに来訪が増え、30人が相談にくる日もある。多くの人は来日してまだ間もなく、JARを最初の拠り所のように思って訪ねてくる。それが、心も体も安心して一息つけない場所であってはならない。アクセスや費用を重視すると、夢のように広い物件に移転できるわけではないが、日本の難民申請者が置かれている過酷な環境に見合った、少しでも安心できる空間を工夫して作っていきたい。



最近の事業進捗



《生活支援・法的支援》

10月頃から新たに相談にくる人数が特に増え、1日の来訪者は過去最多の30人にのぼる日もありました。日本で報道されることはほとんどありませんが、直近ではカメルーンから逃れてくる人が増えています。カメルーン北部のアングロフォン(旧イギリス植民地)と国内ではマジョリティのフランコフォン(旧フランス植民地)の対立激化による影響です。通常より女性が目立ち、シェルター満室時にも宿の手配などに奔走しました。難民認定数は引き続き少なく、2017年上半期は全体でわずか3人に留まりました。JARでは弁護士との連携を広げ、法的支援を強化していますが、難民認定の知らせを喜ぶ瞬間はなかなか訪れません。

《就労支援・コミュニティ支援》

一方、難民申請の結果を待つ平均約3年間、仕事を見つけて自立することが求められます。働くために最低限必要な日本語を集中的に学ぶ就労準備日本語プログラムを、80時間のカリキュラムから180時間に拡大。試行錯誤して作りあげてきた就労支援のモデルが軌道に乗り、より多くの人々が就職につながっています(詳細はp.3)。コミュニティ支援では、難民

が地域社会の資源につながり、自分の力で利用できるよう、また地域社会側の多文化共生の力、包摂の力を高められるよう取り組んでいます。孤立しがちなシングルマザーの難民が、地域社会の輪に加わっていきけるよう、似た状況にある母子たちを集めたサロンを隔月で開催。孤立の度合いに応じて、地域の関係機関につなげる支援も行っています。また、地域社会側の対応力向上を目的として開発した「ゆびさしメディカルカード」は、埼玉県や愛知県などにある合計54の医療関係機関や団体、部門に設置し、外国人住民の対応に活用されています。

《政策提言・ネットワーク》

難民に対して不適切なイメージを流布しかねない問題発言や報道について、JARとしての考えを迅速に発信し、誤解の解消に努めました。最近では、難民申請者の権利をさらに制限する法務省による運用見直しが推し進められていることを受け、関係者と連携して働きかけを続けています。また、メディア懇談会の定期開催を始め、マスメディアの記者と継続的に情報共有する場を持っています。

《広報事業》

2017年12月より、新メディア「ニッポン複雑紀行」をスタートします。日本にすでにある多様性や寛容性を描き出すことを通じて、日本社会を見る新たな視点を提示し、移民・難民受け入れを前向きに考える潮流をつくることを目指します。難民に加えて、移民にまで視野を広げると、日本にはさまざまなルーツの人が暮らしています。多様な切り口から、日本にある移民文化を紹介していきます。乞うご期待!



毎月のご支援が難民の命と未来を支えます — 難民スペシャルサポーター募集中

3,000円 あれば、



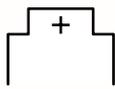
路上生活に耐えている難民が、宿で一泊休むことができます

5,000円 あれば、

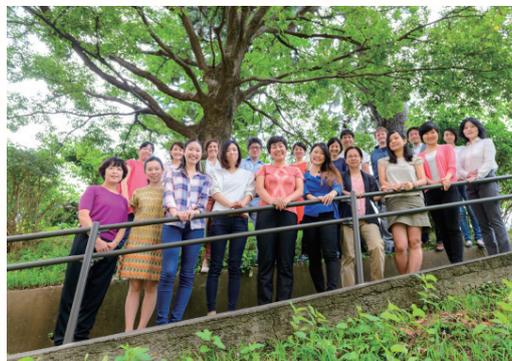


成田空港に向き、とどめ置かれた難民に面会できます

10,000円 あれば、



健康保険に入れない難民の通院1回分の医療費を支援できます



ご支援は
こちら

www.refugee.or.jp/kifu

Tel: 03-5379-6001 (広報部まで)

※ご寄付は、税控除の対象となります。